

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2025



所 属： 人文学部・心理臨床学科

名 前： 久崎 孝浩

ティーチングポートフォリオの作成・更新手順

ティーチングポートフォリオ（TP）は、教育活動の成果や実践を記録し、教育活動を公表するとともに、振り返りや改善に役立てるための重要なツールです。以下に、ティーチングポートフォリオを新規に作成する、または更新する方法を示します。

作成日：2025 年 4 月 30 日

教員氏名：久崎 孝浩

所属：人文学部 心理臨床学科

1. はじめに

大学教員にとって教育活動は研究活動と両輪をなす。しかし、研究者目線で教育内容考えて授業コンテンツを作成したり説明したりしてもあまり意味がないことを、学生の反応等から実感することがよくある。また、教育・授業の内容が学生にとってどこまで影響するものなのかを考えると、個々の学生にとっては今すぐに役立つものから、10 数年経って響くもの、永遠に響かないものもあるだろう。このように、日頃の教育活動や授業から大学教員を定義することは中々に難しい。そこで、自身の観念と行動を内省し、エビデンスに照らして本学における教育活動をここに俯瞰・評価する。

2. 教育の責任

本学で私が担う教育上の責任は、①科学としての心理学に対する学生の深い理解を促すこと、②心理社会研究の技法やデータ収集・分析手法を学生が実践できるよう促すこと、③心理学・人類学に関わる知見から現代生活・社会における課題解決の方法を提供することである。

大学を取り巻く環境は大きく変わり、私立大学では地域や地場産業に貢献する人材の育成が求められその役割が明確になってきているが、大学の教育目標や役割に関係なく、上記に挙げた3つの責任は学生の成長に貢献するものと考えている。

(1) 授業科目の担当

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
フレッシュマン・ゼミ	2023 前期	20 名程度	共通教育
データサイエンス概論	2023～2025 前期	170 名程度	共通教育
発達心理学	2023～2025 後期	50 名程度	心理臨床学科
心理学統計法	2022～2025 前期	50 名程度	心理臨床学科
感情・人格心理学	2024～2025 前期	50 名程度	心理臨床学科
心理測定法	2022～2025 前期	40 名程度	心理臨床学科
心理学実験	2022～2025 後期	60 名程度	心理臨床学科
知覚・認知心理学	2025 前期	50 名程度	心理臨床学科

心理臨床学の基礎	2023～2025 前期	60 名程度	心理臨床学科
心理臨床学の展開	2023～2025 後期	60 名程度	心理臨床学科
心理学研究演習	2022～2024 前期	10 名程度	心理臨床学科
人間科学研究実習	2025 後期	20 名程度	心理臨床学科
特別研究	2022～2025 後期	6～10 名	心理臨床学科
卒業研究	2022～2025 通年	6～10 名	心理臨床学科
心理学研究法	2022～2025 前期	5 名程度	共通教育（大学院）
研究指導	2022～2025 通年	1 名程度	専門教育（大学院）

■ 主要授業科目

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
心理臨床学の基礎	2023～2025 前期	60 名程度	心理臨床学科
心理臨床学の展開	2023～2025 後期	60 名程度	心理臨床学科
特別研究	2022～2025 後期	6～10 名	心理臨床学科
卒業研究	2022～2025 通年	6～10 名	心理臨床学科

■ 非常勤講師

「感情心理学入門」に関わる授業を学外の高校等での出張講義で実施し、特に感情の機能に対する理解を深めることで自身の感情の受容に導くような授業を展開してきた。

(2) 教育組織運営

教育実施においては現在までに、①共通教育・専門教育科目授業、②データサイエンス教育の充実化・洗練化、③ICTを活用した教育の推進、④共通教育科目の充実化・洗練化、⑤教学 IR データの解析、⑥教育の質を保証するための制度導入の検討、を担当してきた。

① 共通教育・専門教育科目授業：共通教育では「データサイエンス概論」を部分的に担当し、データや AI の活用事例、データ可視化・分析と AI の基礎、情報セキュリティのリスクと対応策について講義を行っている。専門教育科目では、まず「感情・人格心理学」「知覚・認知心理学」といった心的プロセスの中核にある知覚・感性・感情・認知を対象として生活・社会の中でそれらがどのような特質をもって機能しているかを考究することを目指して講義中心の授業を行っている。また、「心理学統計法」「心理学実験」「心理測定法」では、調査・実験の手法やサンプリングだけでなく、収集したデータの要約・可視化・分析の基礎スキルを表計算・統計ソフトウェアを使用して学修する機会を提供している。その他に、「心理学研究演習」では、履修学生が主体となって文献検索・購読、研究テーマの設定、調査実験計画、データ収集・分析、考察を含む報告書の作成という一連の研究活動を実践し、教員がその活動をサポートする授業を行っている。

② データサイエンス教育の充実化・洗練化：共通教育の一領域としてあるデータサイエンス科目のうち3科目は文科省のリテラシーレベル認定を受けており、履修者を増やすべく充実した内容を提供できるよう毎年度検証を行っている。検証においては、入学者にとって理解しやすい内容になっていること（高大接続）と社会人にとって有益な内容である（出口接続）が検証ポイント

トである。特に本学では、PC 操作や情報の扱いに学生間格差があるため、現在はデータサイエンス・A I に関わる基本概念と現状理解、データ・統計の基本概念、Excel でのデータ処理を中心とする内容となっている。しかし、今後の高校での情報科教育の充実化と社会でのデータサイエンス・A I 活用の広がりを想定して、授業内容を改善する必要性があるものと思われる。

③ ICT を活用した教育の推進：本学では WiFi が充実してどの教室・環境でもネットワーク接続が可能であり、また MS365 を導入して学生は Microsoft の Office アプリを使用できるようになっており、さらにネットワークやツールを使って学修の効率と効果を高める取組みが求められる。その取組みとして、学修ポートフォリオの活用意義を高めるようなデザインや仕様を検討し、学修における AI 使用のルールを整えて学生がよりスムーズに AI を使用できるよう環境整備を進めているところである。

④ 共通教育科目の充実化・洗練化：現在社会では、特定領域の知に限定されない総合知の修得、そしてその総合知を実際に活かすスキルの修得が求められている。総合知の修得においては、特定テーマで各領域の教員が授業を担当あるいはコラボ担当して、領域間で接合された知を修得できるよう検討している。また、総合知を活かすスキルの修得のために地域課題解決型科目を検討している。

⑤ 教学 IR データの解析：学生や教員が生成する様々なデータ（具体的には、入試成績、GPA、DP 到達度、授業評価アンケート、学生動向調査アンケート、卒業時アンケート等）によって教育改善に向けた検討を重ねていくことが教学マネジメントとして求められている。教育改善の主体である教員及び教員組織に向けて、適切にデータを処理して教育・支援・環境の効果を検討できるような解析結果を示すことができるよう、IR・大学評価の動向を把握しながら解析方法を研鑽している。

⑥ 教育の質を保証するための制度導入の検討：教務委員また FD・SD 委員として各種制度導入に向けて情報収集と会議検討を重ねている。特に昨今は、学修動機づけを高めるための成績評価方法やガイドラインの検討、スチューデントアシスタント導入の検討、ティーチングポートフォリオの検討、学修ポートフォリオの検討を進めてきた。特にスチューデントアシスタントは単なる授業補助としてだけでなく、学生にとって効果的補助となるような体制作りを進める必要がある。ティーチングポートフォリオは学生や地域の大学教育の質を保証・公開するものとして機能するようなデザイン設計と体制作りが求められる。学修ポートフォリオにおいては、DP 到達度を学生・教員が積極的に活用できるような指標に作り直し、学生の学修記録を自主的に掲載・公開できるブログ的なデザインかつディプロマサプリメント仕立てになるよう、学修ポートフォリオの再設計を検討している。

3. 教育の理念

教育の理念については以下のとおりである。

(1) 理念Ⅰ「事象を多面的に考察する力を養う」

心理臨床学科の学修では、集団や文化等の社会的事象から個人の心理的事象に至るまでを対象とするが、そうした事象は様々な視点から検討することでその本質と意味が理解できると考える。特に人の心にかかわる事象はその本質と意味を理解しなければ、その事象を排他的・差別的にみることにも繋がる場合もあり、人の心は無条件かつ積極的に理解しようとする基本的態度から外

れてしまう。例えば、「自己意識」という現象を定量的にみた場合、それが過剰であれば自己意識過剰・自己愛の強さと把握され、それが寡少であればメタ認知欠如や恥知らずと把握され、自己意識を価値的側面でしか考察できなくない。しかし、進化論、脳科学、発達といった他の視点から自己意識を捉えようとする、自己をモニタリングして適切に行動を調整することで集団に適應するうえで不可欠のものであることが見えてくる。この例のように、事象を多面的に考察することはその本質を理解し、さらに発展・応用させることにも繋がると考える。

(2) 理念2 「考察するレベルを考慮してデータを理解・活用する力を養う」

物事を客観的に理解する際に提示されたデータを読み取れることは重要であり、自分自身の考えや主張を話すときにデータやそれを分析した結果を示すことが効果的であることは言うまでもない。しかしさらに言えば、物事を理解しようとするレベルに応じて、データや分析方法を選択して結果を示すことができるようになることは、社会人としても必要なことだと考える。例えば、父親不在の家庭の中で母親の厳しいしつけを受けて育った子どもが良からぬ友人と非行行為を行うことが頻繁になったという事例を聞いて、「父親不在によって生じる母親の厳しいしつけは子どもを非行化させる」と一般化してよいのであろうか。物事を理解するレベルは事例レベル、経験則レベル、理論レベルとあり、各レベルに応じたデータや分析方法がある。先ほどの例で言えば、その1つの事例から経験則レベルでも「父親不在によって生じる母親の厳しいしつけは子どもを非行化させる」と言うためには、父親不在で母親のしつけの厳しい家庭だけでなく、父親不在だが母親のしつけが厳しくない家庭、父親が居ても母親のしつけが厳しい家庭、父親が居て母親のしつけも厳しくない家庭の子どもの非行傾向データを収集する必要がある。さらに、理論レベルでもそれが成立することを言うためにはそうした調査を複数集めて地域・文化間で共通していることをメタ的に確認する必要がある。理解するレベルとデータの扱い方の対応関係を知っておくことで、極論や歪んだ解釈を避け、現実的に物事に取り組むことができると考える。こうした知識・スキルはどこでも通用し、本学学生が身につけるべき力だと考える。

(3) 理念3 「他者の意見を理解して弁証法的に解決する力を養う」

自己の考えや主張ばかりを話すことでは他者とのコミュニケーションや協調・協働は成り立たない。どのような状況でも、他者の考えや意見を丁寧に聴く（決して従うわけではない）態度は必要である。さらに言えば、その話を既存の知識でまとめて他者の考えの核心を理解できることも、自分の考えとの比較や統合を冷静に行うために大切なことだと考える。特に大学教育では、提供される知識を鵜呑みにして身につけるだけでなく、様々な情報を参照して、弁証法的に、相対立する複数の知識を矛盾のない考えにまで発展・統合させる力を身につけることも重要なのではないかと考えている。特に社会に出れば、自分のもつ考えや生き方とは異なる他者との出会いが多くなり、自分の考えや生き方だけでなく他者の考えや生き方を尊重しながら社会的責務を果たさなくてはならない。現代は特定のメディアや情報によって他者理解が歪められがちであるからこそ、得意自他ともに尊重した生き方を歩んでいくためには、学生が弁証法的に知識や考えを整理・統合する力を身につける必要があると考えている。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

(1) 理念1 「事象を多面的に洞察する力を養う」

多面的に洞察する力を身につけるためには、多くの分野において知識を豊富にもつことと、実際に1つのテーマや事象に対して多面的に考えを整理してみることが必要だと考える。授業では、なるべく1つのテーマや事象に対してその領域の視点だけでなく他領域の視点を持ち込んで説明を行っている。特に心理学は学際的なものであり、心理学が扱う事象の多くには、生物学、医学、脳科学、文化人類学、社会学、教育学、教育工学、統計学等が交差する。こうした多様な視点からのアプローチを授業にも導入することで、その事象の本質や働きを理解できるように学生に説明し、その事象に対する理解を発展・応用できるように努めている。

(2) 理念2「考察するレベルを考慮してデータを理解・活用する力を養う」

データを理解・活用する力を養うという理念は心理学系のどの科目でも意識しており、これまでに研究されてきた調査・実験結果を統計的概念に基づいて説明することで、心理学で扱われる事象について学生が納得できるように努めてきた。

また、心理学統計法では、実際にデータを使って学生に集計や推定を行ってもらい、データを活用する基本的なスキルを身につけることを目標としている。また、心理学実験や心理測定法では、実験・質問紙調査・行動観察によって実際のデータを収集して、学生が適切な方法で集計と推定を行う授業を展開し、卒業研究だけでなく企業・産業界でも求められるデータ収集から集計・推定までのスキルを修得する機会を提供している。こうした授業科目は、現代社会でも求められる、データを理解・活用する力を涵養することに繋がると考える。

ただし、考察するレベルを考慮してデータを理解・活用するということになる、取り組むテーマや事象とデータ収集の関係を理解する必要がある、より実践的な研究調査が行われる心理学研究演習（人間科学研究実習）、特別研究、卒業研究の科目の中で個別相談やディスカッションを通じて指導してきた。研究で参考にする文献が事例、経験則、理論のどのレベルなのかを確認したり、研究で特定の事象に対して事例、経験則、理論のどのレベルでアプローチするか（どのようなデータ収集を目指すのか）を決めたりすることが指導では求められる。特に、現代社会においてはデータ活用の一環としてAIを使用することは通常となり、AI使用によって多量の情報を集約したりアイデアを創造したりすることで様々な取り組みや研究を効率よく進めることができるようになったのは学生や教職員にとって好ましいことである。しかし、そのことによって、人間の歴史の中で培われてきた感性や思考の時空間が無視されて、AIが生み出したものを自分の考えやアイデアの一部とすることには注意しなければならない。なぜなら、AIが生み出したものをAI自身が事例、経験則、理論のどのレベルなのかを説明することはまだ難しく、学生や教職員は事例、経験則、理論という枠組みを見失ってしまう可能性があるからである。AI使用を妨げることはないが、取り扱う・考察するレベルについては注意喚起を行う必要がある。

(3) 理念3「他者の意見を理解して弁証法的に解決する力を養う」

まず、学生が他者の意見を理解する力を育むためには、他者との意見交換（ディスカッション）の機会を設けて、教員も学生の意見を適度に受け入れて、教室内でまずは意見を一旦受け入れることができるようなムードを作ることが必要だと思われる。しかし、心理学実験、心理測定法、心理学研究演習（人間科学研究実習）といった演習・実習系科目以外の科目は、教員が知識提供等でリードする必要があり、ディスカッションの時間をあまり作っていない。本来ならそうした科目でも、教養的知識や専門知識を身につけてもらうために、事前学修課題を用意してディスカッションや問題解決型学習やディスカッションを取り入れていく必要があるが、十分ではない。

また、弁証法的に統合・解決する力を身につけさせるためには、自他の意見の矛盾を解消するような上位の考えを導出することを目標とした授業を実施する必要がある。具体的には、意見が分かれるような問題を設定して、同じ意見をもつ学生同士でディスカッションを通して意見をまとめ、さらに意見の異なる学生グループを組み合わせ対立的なディスカッションを行って意見の矛盾を解消する考え方を出示してもらうような方法である。こうした方法で授業を進めたいが、グループ内・間で意見がまとまらない場合にどのような対応をすべきかをよく分かっておらず、授業は知識提供型に偏って十分な実施には至っていない。

5. 教育改善のための努力

(1)最新知見の導入：発達心理学，感情・人格心理学，知覚・認知心理学では学生の知的好奇心を高めるために、その領域にかかる最新のインパクトのある研究成果をなるべく紹介・説明してきた。特に知識提供型の講義形式授業は学修目的が見えなくなってくるため、最新知見の説明は今後必要だと考えている。

(2)実験デモの導入：感情・人格心理学，心理学実験，知覚・認知心理学では説明から感覚的な理解に至らず腑に落ちないことが多いため、学生がWeb上の実験デモに参加したり、実験調査の様子を映した動画を視聴したりできるように、コンテンツのURLを紹介しているが、こうした取り組みが今後必要だと考える。

(3)質問を引き出すこと：特に講義形式の授業では学生の理解度を推し量りにくいため、説明を区切って質問を待つ時間を設けたり、教員から質問を投げかけて学生に考えてもらう時間を作ったりしている。

(1)改善努力1

「発達心理学」や「感情・人格心理学」では、「教員から課題などの提出物にフィードバックがあった」「グループワークやディスカッションの機会があった」「教員から意見を求められたり、質疑応答の機会があった」といった項目の評価が平均より低い。特に事前学修・事後学修課題に対するフィードバックを行っておらず、知識提供型ゆえにコミュニケーション・ベースの学習機会を提供していない。今後はMoodleを活用して、学生には講義等の一部を事前にMoodleで視聴してもらい、対面授業では特定課題に関するディスカッションを行うよう努めたい。

(2)改善努力2

「心理学統計法」では、「グループワークやディスカッションの機会があった」「教員から意見を求められたり、質疑応答の機会があった」の項目評価も低い。が、「授業内容の意義や必要性を十分に説明してくれた」や「全体として、この授業はあなた自身に役立つものでしたか」の評価も低い。履修学生がデータ統計処理スキルはあまり必要としていないことを物語っており、社や企業現場でいかに統計処理スキルが必要なものであるかを示す必要があるが、授業においては企業・産業界との連携を組んでおらず、実際に統計処理スキルの有用性を企業・産業界より講話いただく必要がある。具体的な連携を構築して、統計処理スキルに対する学生の認識を高めたい。

6. 教育の成果・評価

上記の理念や考えに基づいて教育を実施して得られた成果として、授業評価データを経年比較しているわけではないが、授業評価の幾つかの項目が若干向上し平均より高くなっていることが

挙げられる。また、卒業研究での学生の論文作成や発表に手応えを感じることも多くなり、学生のデータ収集や統計処理のスキルや論理的な文章構成力に驚かされることがある。

しかしながら、担当している科目が心理臨床学科や共通教育のディプロマ・ポリシーに定められた能力にどの程度貢献しているかは分からない(カリキュラムマップの妥当性も確認できない)。教育成果・評価は、必ずしも定量化された指標から把握するものではなく、小規模の本学だからこそ学生とのコミュニケーションの中で見いだされるべきものなのだろう。

7. 今後の教育に関する課題と目標

(1) プログラミングの導入：昨今プログラミング環境の簡便化・web化が進み、学生は手軽にプログラミングで統計処理やPCを使った実験を実施することができる。統計処理では高額ソフトウェアを購入する必要がなくなり、実験でも視聴覚に関わるものであれば、PC上で適切なタイミングでの刺激提示と反応データ取得が可能になっている。「心理学統計法」「心理学実験」「心理測定法」では統計処理をRで実施しているが、Rでのファイル読み込みやデータ分析に難を示す学生はまだ多い。Rのコード入力実行の機会を学生に多く提供するために、データ分析の問題とR操作動画を授業外課題として提示して、回答フィードバックを行うことは、今後必要なことだと考えている。また、「心理学実験」では、具体的に実験計画に従って学生がpythonやPsychoPyを使用して実験プログラムを作成することも試みたい。

(2) AIの使用：どのようなAI使用の在り方やルールが学生の学修効果を高めるのかは十分理解していないが、ネット上にある多量の情報から必要な情報を一気に収集したり、参考論文を要約したり、作成した論文の添削を行ったり、データ分析や実験のコードやアンケート項目を作成したりするなど、幅広くAIを活用することができる。AIの活用方法を提示しつつ、AI使用上のルールや注意点を発信していくことは今後の目標の一つだと考えている。

(3) 課題解決型学修の導入：科目の性質もあって知識提供型授業が多いが、「心理学統計法」「心理測定法」「人間科学研究実習」では、実データをもとに問題発見・解決に繋がるより実践的な授業に移行していきたい。例えば、「心理学統計法」では基本的な統計処理スキルを修得したことの集大成として、外部のオープンデータを使って問題発見を目指す授業を試みたい。また、「人間科学研究実習」では、実際に外部フィールドあるいは企業と連携して、履修学生主体で問題発見・解決につながる調査・分析・提案を行うことを目指した授業を展開したい。こうした課題解決型学修を実施することで学生の履修意欲や学修効率も高まるものと考ええる。

(4) ディスカッション：課題解決に向かうまたは知識をより深めるためには、①学生間で多くの意見を出し合うこと、②意見の具体的な相違点を理解すること、③その相違点を解消するために新たな概念やアイデアを導出することが必要であり、それらの機会がまさにディスカッションである。現実社会に散在する課題の多くは矛盾点を内包するもので、ディスカッションによってその矛盾点を解消するための新たなアイデアを出せるかもしれない。ディスカッションの時間を積極的に作り、学生の効果的な学修と課題解決を図りたい。

【根拠資料】

<授業評価アンケート結果> (URL 学内参照)

・発達心理学

(2024 年度後期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokouki2024&openfile=D2030_1-2.pdf

(2023 年度前期：発達心理学Ⅱ)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2023&openfile=D4890_2-4.pdf

(2023 年度後期：発達心理学)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2024&openfile=D5170_3-4.pdf

(2022 年度前期：発達心理学Ⅱ)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2022&openfile=D4890.pdf>

(2022 年度後期：発達心理学Ⅰ)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokoki2022&openfile=D2040.pdf>

・感情・人格心理学

(2024 年度前期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2024&openfile=D4800_1-2.pdf

(2023 年度後期：感情・人格心理学Ⅱ)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokoki2023&openfile=D4790_2-4.pdf

(2022 年度後期：感情・人格心理学Ⅱ)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokoki2022&openfile=D4790.pdf>

・心理学統計法

(2024 年度前期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2024&openfile=D4690_1-2.pdf

(2023 年度前期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2023&openfile=D4690_2-4.pdf

(2022 年度前期)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2022&openfile=D4690.pdf>

・心理学実験

(2024 年度後期)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2024&openfile=M0180.pdf>

(2023 年度後期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokoki2023&openfile=D4710_2-4.pdf

(2022 年度後期)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyokoki2022&openfile=D4710.pdf>

・ **心理学研究演習**

(2024 年度前期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2024&openfile=D5170_3-4.pdf

(2023 年度前期)

http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2023&openfile=D5170_2-4.pdf

(2022 年度前期)

<http://akard.klc.ac.jp/~info/pukiwiki/index.php?plugin=attach&refer=jugyozenki2022&openfile=D5170.pdf>